

一字一筆

静岡の今

防災 見直しの時

立春から数えて二百十日（今年は9月1日）と二百二十日（9月11日）のころは天候が崩れやすく、昔から農家の厄日とされてきた。今年は9月4日、上陸は25年ぶりという「非常に強い台風」21号

が関西空港を水浸しにし、2日後の9月6日未明には震度7の地震が北海道を襲った。

自然災害の多い日本ではこのころ各地で防災訓練が行われ、県内でも2日、静岡市を主会場に県の総合防災訓練が行われた。その直後の「魔の期間」に発生した二つの自然災害は、これまでの防災常識に警鐘を鳴らしている。

その一つは、「地震は予知できない」と再認識しなければならないことだ。専門家によれば、今回の北海道地震は警戒していた活断層以外で発生した可能性が強いという。そして、震度7程度の地震は「日本のどこでも、いつでも起こりうる」と警告している。私たちが長年「予知できる」としていた東海地震も「予知できない」という前提で防災対応をしなければならぬ。

もう一つは、台風21号に直撃された関西空港に約8千人が取り残されたことである。想定外の高さの高潮が防波堤を越え、強風で流されたタンカーが連絡橋に衝突して通行を閉ざした。二つの巨大災害は、予知のできない地震や、人智では完全に予防できない自然災害と向き合っ

て暮らしていることを改めて教えてくれた。
8月26日、富士山の裾野で恒例の陸上自衛隊富士総合火力演習が一般公開された。見学した約2万4千人は災害出動で活躍する自衛隊の、もう一つの姿に目を奪われた。

防災や災害救助に、自治体や自衛隊の組織力は欠かせないが、ささやかな「自助」も大切だ。

北海道地震の「ブラックアウト」で困ったのは、スマホの充電や小銭の準備だった。（前静岡県監査委員・富永久雄）

陸上自衛隊の富士総合火力演習Ⅱ東富士演習場、全日写真・高根美奈夫さん撮影

